
ロックンロール大将

ごはんライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロツクンロール大将

【Nコード】

N6186Q

【作者名】

ごほんライス

【あらすじ】

大アドリブ大会ゆえに、完成しないと、どんな感じになるかわからない……演繹法が多いな。

イントロ（狼男）

暗闇。それは月が雲に隠れたから。

男が歩いてる。三十代半ばか四十代か。よくわからんがおっさんである。

雲が逃げて月が現れた。

月の光を浴び、男はだんだん毛むくじらになって、わおーんと叫んだ。

月がびっくりしてる。そう。男は狼男。

狼男になると、どうしても人の血が欲しくなってしまふ悲しい体質。

月がケータイで警察に通報しようとしてる。男は石を投げる。「いてっ！」月の腕に命中し、ケータイを落とした。

「コンビニに行ってコンビニの店員の血でもすするか」

しかし、さすがにこの顔と手はまずい。ばれる。

そういう時のために狼男は常に、手袋とサングラスとマスクを常備してる。これらを装着すればかなり怪しいが、しかし、外せばもつと怪しい狼男。

コンビニ

狼男がコンビニに入ったら、まずは雑誌棚に回る。おもむろにエロ雑誌をとり、表紙を凝視する。必死にシールを破ろうとする。店員があやしがり注意すると、狼男は、サングラスとマスクを外し、がおーっ。

店員はびっくりして目が飛び出る。

今度は狼男が、その目の飛び具合に驚いて、口から火を噴く。すると、店員がまたそれに驚き、飛び上がるが、飛び上がり過ぎて天井に頭を強打する。狼男は、それ見て驚く、というか落下してきた店員の下敷きになり床に倒れる。

山形たけしは、その様子を横目で見ながら、漫画雑誌を棚に戻す。

たけしは、店員が狼男と重なって倒れてるので、こりゃレジは無理だなあと思い、そのまま何も買わず、外に出た。

たけしと華子

たけしは、アパートに戻り、小説の続きを書き始めた。たけしは非正規労働者である。何としてでも小説を所得にせねばならない。

といっても狭き門ではある。しかし、非正規は非正規であまりに低賃金で生活が苦しいし、社員雇用も不況の今、難しい。だから、ひとまずは小説に燃えるしかない。

たけしは、コーヒーを飲んで腕をまくる。

十枚ほど書いたところで、華子の写真を眺める。ケータイの待受け画面を、たけしは、彼女の華子の顔写真にしているのだ。

華子かわいい。けど、セックスとかはしたことがない。たけしが、小説家になるまではセックス禁止と決めたので仕方ないことなのだ。華子は華子でありエロなところがないのでちょうどよいが。

「気分転換に、ビデオボックスにでも行くか」
誰に言ってるのかな。読者かな。

たけしは原付にまたがり、飛ばした。

途中で野良犬をはねる。

「わいーーーーーん」

気にしないのがたけしのいいところ。

悪いとこだろ!!!

十分くらいして、ビデオボックスに到着。たけしは店内に入る。

棚を眺めると、実に色々なDVDがある。まあこれは児童書などで詳しくは書けないが。

たけしは、個室に入った。

その頃、華子は、布団の中で、ケータイの待受け画面を眺め、にやにやしていた。待受け画面には、たけしの変な顔が貼り付けられている。

華子は正社員である。たけしを養おうと思えば養える。しかし断るたけしをかつこいいなあと思う。

「うふふふ。たけちゃん。かわいい」
誰に向かって言ってるのかな。読者かな。

ラブホテル

華子とたけしは、休日にラブホテルに行った。無論、セックスをするわけではない。二人で話したり、DVD観たり、添い寝したりするだけだ。

そんなのもまた楽しい。照明はピンクで、妖しい雰囲気醸し出している。華子とたけしは見つめ合い、まあキスくらいはする。

こんな時でも、たけしは小説のことを忘れてない。華子が職場であつた面白いエピソードを話すと、たけしはメモ帳にさらさら書いていく。小説のネタにしようと思ってるのだ。

「たけちゃん。実名使っちゃあよ」

「もちろん加工するよ」

たけしは架空の指輪を華子にはめてみる。

「たけちゃん。結婚してくれるの」

「架空だけだね。リアルは小説家になつてからだ」

「んもう」

二人でははと笑い合う。不思議な関係の二人である。

たけしは、ふと十年前に好きだった女の子のことを思い出す。華子は華子で十年前につき合っていた元カレのことを思い出す。

特に意味はない。ただ思い出したただけだ。

外で月がくしゃみをした。

河野夜子

華子は、ある日曜日、バレンタインチョコを店で選んでいた。無論、たけしにあげるためだ。

色々手にとるがどうもしっくりこない。手作りのがいいかなと思う。

たけしは、その頃、図書館にいた。朝のバイトが終わって、そのまま原付で直行した。

たけしは、ソファで織田信長関係の書籍を数冊積んで眺めている。信長を題材に書こうかなと少し考えているのだ。

たけしが好きな坂口安吾が「信長」という長編を書いているので、その影響と思われる。

たけしは、一旦、二冊だけ借りて、中庭に出た。いい天気である。芝生の上に猫が気持ちよさそうに寝てる。

たけしはベンチに座り、コンビニで買ってきたサンドイッチを食べながら、猫をスケッチしてる。たけしは絵を描くのも好きである。

「お上手ですね」

「え」

振り向くと後ろでショートカットにジーンズといった出で立ちのボーイッシュな女性がたけしの絵を眺めていた。

「かわいらしい。あたし、こういう絵好きだなあ」

「ど、ども」

女性の名は河野夜子と言い、近くの工場で正社員として働いているらしい。

夜子もなかなかの小説フリークであり、たけしと話が合う。

たけしは、心のどこかで、華子に見つかったら殺されるなあとビクビクしていた。

猫がふああと、大きな欠伸をした。

夜子との密会

たけしは、それからちよくちよく夜子のアパートに通った。もちろん華子には内緒である。ばれれば殺される。

「夜子の料理は旨いなあ」

「あたしも作ってあげる人がいると、作りがいがあるよ」
なかなか楽しいひと時である。

「たけしくんはなぜ結婚しないの」

「オレ、作家になるまで女禁止にしたものね。夜子はなんでよ」

「あたし、昔親に捨てられて児童擁護施設で育ったの。それがトラウマになってるのかなあ」

「ふうん」

「いずれにせよ、人には何かしら事情というものがあるもんだ。」

「華子なぜ結婚しないのかは、単純にたけしがしてくれないからであるが。」

柏餅先生

ある日、たけしは、小説家養成教室に行った。最近、入ったばかり。近所にあるので通うのがラクだ。月謝もけっこう安い。たけしが非正規労働者でも払える額だ。

ただ、先生がちよっと特殊である。二十年前にデビューして以来、三冊しか出してない。プロと呼んでいいのか。元プロというべきか。当然、先生も非正規労働をしているが。

頭はぼさぼさで、着物を着てる。昔の文学青年のイメージだ。

四畳半の先生の書斎。たけしは、原稿を見せる。毎回、先生が禁止事項とテーマを出し、やらせる。

「ど、どうですか先生」

「お前、悪人の描写が甘いよ。リアルじゃない。よし。今から悪いことをしに行くぞ」

「はあ」

たけしと柏餅先生は、ぼろアパートを出る。

「まずは、この塀に小便するのだ」

「ええつやばいすよ。軽犯罪すよ」

「かまわん。やるのだ」

仕方ないので、たけしは塀に向かって小便をぶちまける。隣では、柏餅先生も派手にかましてる。

「ようし。うんこもしてやる」

「あつそれはやばいすよ。ちよつと!」

「こらーっ!」

塀の隣の扉が開き、主が出てきた。

「ぼ、ボンジュール中西先生!」

何と、主は人気作家のボンジュール中西であった。

「殺す」

「た、たけ。逃げるぞ」

「ほ、ほさー。」

逃亡

たけしと柏餅先生は、逃げに逃げた。ボンジュール中西先生が、弟子たちといっしょに追いかけてくるのだ。みんな日本刀やハンマーを振り回してるので、ごっつ怖い。

二人は、路地裏に逃げた。暗い暗い狭い狭い通路を駆ける。汗がだらだら流れる。

「たけし。あそこドア開いてるぞ。あそこに入れ」

「あい」

二人は、開いているドアに駆け込んだ。

ちようど、家族が食事をしていた。ちゃぶ台を囲んで、お父さんお母さん子供。

「あ。すみません。えへへへへへ」

「どうぞどうぞ。食事を続けてください」

「続けてくださいって言われてもねえ」

家族は困惑気味だ。

奥の部屋から、おばあさんが出てきた。

「なんじゃ、この奇妙なやつらは」

「お母さん。わかりません。急に上がりこんできたんです」

「えへへへ。柏餅です。かしわっちゃんて呼んで。えへへへ」

「たけしです。たけしって呼んでください」

ばあさんは、柏餅先生の身体を持ち上げた。「ひ、ひいいいいい。

たけし。助けてええええええ」

「柏餅先生！」

ばあさんは、床に、柏餅先生を叩きつけた。「痛いいいいいいいいいい」

たけしはしりもちをついてがたがた震えている。

「ふん。次はお前の番だよ」

たけしは、殺されると思って、小便がじゃああああと流れてし

助けてえええ

たけしはばあさんに四回くらい床に叩きつけられ、骨折して入院した。

病院のベッドの上でいまいまいしい思いをしているたけし。

「うちきしよう。腕が使えないから小説書けないよ。くそ腹立つたけしは何もできないので、イヤホンでビートルズを聴いていた。」

「ああ。心に染みる音楽だな。ビートルズって天才集団だな」

たけしはビートルズを聴いてるうちに眠ってしまった。

その頃、たけしはピンクのもやを漂っていた。あっちへ行ったりこっちへ行ったり行き先が不確定である。

そうしてるうちに、ピンクのもやを抜けて、たけしは落下した。

「うわああああああああっ」

どンドン落下する。10メートル。20メートル。30メートル。着地する気配がまるでない。

「どこに行くんやああああああっ」

10分ほど落下しただろうか。

たけしは、ゼリー状の海に飲み込まれた。

「なんじゃこらあああああ」

ぷるんぷるんしてる。

たけしは必死にもがくが、ぷるんぷるんするばかりで身動きがとれない。

「うわああああ。助けてええええ」

???

夢から生還し、汗びっしょりである。なぜ怖い夢を見るのか理由は明白である。35歳であるのにアルバイトだからだ。将来に不安が多すぎるのだ。

たけしは、早く小説を所得にし、アルバイトから脱出せねばならぬと思う。でないと、健康に悪すぎる。

退院し、たけしはまた小説に邁進した。

ふと書いてると、疑問に思うことがある。

すばる文学賞に初投稿したが（発表はまだである）どの程度、審査員が、あるいは読者が理解してくれるのか。

自分では面白いのはわかってる。しかし、たけしにはネットでしか発表した経験がない。

すると、世間でどれくらい自分の小説が受け入れられるかというのが、いまいちわからないのだ。

まあ悩んでいても仕方ないが。こればかりは、実際に書籍化されてみないことにはわからない。

たけしは、今日も徹夜であった。

別れたのに……。

結局、華子とたけしは別れた。たけしがなかなか結婚してくれないので、華子が業を煮やしたのだ。

仕方ないことだけどな。たけしは小説家にならないと結婚しないと決めた。そして、まだなつてない。だから、いくら華子が好きでも結婚できないのだ。

たけしはまた一人ぼっちになった。

部屋でさみしくカップヌードルを食べていると、ケータイが鳴った。

「もしもし」

「たけちゃん？ あたし。華子」

「え。華子」

華子によると、華子もさみしくなってきた、つい電話をしちゃったというのだ。

「しかし、もうオレたち別れたし」

「華子、たけちゃんがいないの耐えられない」

「そんなこと言われてもなあ」

再びつきあう二人。

結局、再びたけしと華子はずきあうことになった。なかなか離れられない二人。

しかし、たけしは部屋で執筆しながら焦る。このままじゃ華子と結婚できない。

確かにすばる文学賞には応募した。しかし、発表がまだまだ先。それまではアルバイト一本だ。

いや、当選しなければ、またアルバイト専門でがんばらないといけない。

「焦る焦る焦る」

たけしの友達で、きよしというやつがいるが、こいつもプロ作家を目指している。

しかし、きよしは正社員である。生活に苦労していない。たとえ、プロ作家になれなかったとしても、経済的に余裕がある。無論、結婚もできる。

しかし、たけしは……プロ作家になれなければ、女房子供も養えない。

「華子……やつぱり別れよう」

「あたしが子供とたけちゃんを養う！」

「だから、それはいやなんだよ」

「つきー……！」

たけしは悩む。一体、オレは35にもなって何をしているんだ。

35といえば、正社員としてバリバリ働いてる年齢。

あるいは、プロ作家としてバリバリ働いてる年齢。

それなのに、たけしはアルバイトである。悔しい。

無論、すべてはすばる文学賞の結果次第であるが。当選すれば道は拓ける。

しかし、発表までまだまだ日がある。

たけしは寝ころんだ。

「あーどうしたのか。くそ。くそ。くそ。くそ」
たけしは葛藤に狂い、癒えない。

塾講師

たけしは、朝スーパーでバイトし、夜塾でバイトしている。それ以外はだいたい小説を書いている。

勤務先の塾で、かわいい女性講師が新しく入った。プリン大学の一年生らしい。

「たけしさん。優しく教えてくださいね。ロリ華、優しくしてくれないと泣いちゃうもん！」

「か、かわいい！」

たけしはちんこがギンギンになってきた。

その時、華子が家でくしゃみをした。

「たけちゃんのやつ、浮気してないでしょうねえ」

仕事が終わりに、ロリ華先生が、たけしに、家まで送ってと言う。

「しかし、今日、彼女と約束が……」

「送ってくれないと、ロリ華泣いちゃうもん！」

「かわいい！」

たけしはちんこがギンギンになってきた。

「華子。もやし山先生たちと今日麻雀だから」

「そう」

「つきあいだからさ。ね」

「わかったわ。浮気じゃないでしょうね」

たけしは焦った。女の勘は鋭い。

「ち、ちげえよ」

「浮気だったら殺すからね。たけちゃん」

たけしは、車を持ってないので、歩いて、ロリ華先生のアパートに向かった。

「ロリ華。たけしさんみたいな優しい人のいる塾に勤務できて幸せだな」

「ははっ。別に優しくないけどね」

たけしはちんこギンギンである。

ロリ華がたけしの腕に抱きついてきた。

「こっくら」

「だって、夜って怖いんだもん」

か、かわいい!!!

たけしはますますちんこがギンギンになってきた。

通り魔事件

プリン市街で通り魔事件が発生した。犯人は、たけしと同じ非正規労働者。

「きゃあああああ」

「殺す殺す殺す」

犯人は、わずか、十分の間に、8人を刺した。

警官に取り押さえられ、警察署に連れていかれた。

秋葉原の通り魔事件からまだ五年も経っていない。それなのにまた起こってしまった。

低賃金重労働。

あまりに低所得過ぎて、まともに生活できない労働者が山のようにいる。

しかし、政府は、金持ちにしか援助しない。

通り魔事件が起こるのが普通であるといえる。

これだけ、起こらない方が不思議。通り魔件数が少なすぎるのが異常といった感じ。

おそらく、日本人は真面目だから、少ないのだろう。

真面目じゃなかったら、通り魔事件はもっとももっとたくさん起こってる。

チャップリン

たけしは、夜子のアパートで食事をしたあと、原付でビデオボックス「銀次郎」に行った。

暗くて狭いボックスの中にいると落ち着く。胎児になった気分だ。とにかく、最近は寢床と職場の往復ゆえに、小説を書くのが愉快でならない。現実逃避である。

たけしは、ふとレコーディング・マシンがほしいなあと思う。七万円くらいだ。

アルバイトではとても買えない。買うと生活ができなくなる。

これは何としてでも、すばる文学賞に当選されなければならぬ。まあ、まだまだ発表まで日があるゆえ、待つしかないが。

たけしは、「チャップリン評伝」を眺める。
色々類似点を発見する。

チャップリンは西洋の小さな島国に生まれ、幼い頃、貧困に苦しんでる。

成人してから金持ちになって、若い女性が好きだった。コメディアンであり、読書家だ。シヨウペンハウエルに傾倒していた。幼い頃、教育をまともに受けられなかった経験から、多読家だった。

たけしは極東の小さな島国に生まれ、今、アルバイトとして貧困に苦しんでいる。華子は大人であるが、感性が幼い。

そして、たけしも小説が当たれば金持ちになる。

ギャグ小説を書いており、小さい頃、小説はほとんど読んでなかった。漫画ばかり読んでいた。その反動で、今、たくさん小説を読んでいる。

相違点もある。

チャップリンは大陸に渡ってるが、たけしは渡っていない。チャップリンはマジで貧しい地域に住んでいたが、たけしはインフラの整備された日本に住んでいる。

暑い暑い日のたけし。

たけしは、アパートで、上半身裸になりながら、机に向かっていた。

「ああ。暑いなあ」

原稿用紙の升目を埋めていく。

「新人賞まで間がない。急がなくては」

誰に向かってしゃべってるのかな。読者かな。そうかも。違つかも。扇風機。

「のどかわいたな」

たけしは冷蔵庫に向かった。

「きんきんのコーラだぜ」

たけしはペットボトルをおでこに当てる。

「ひい。最高」

窓の外を見ると、薄着の女子が歩いている。

「お。かわいい。ナンパしよう」

たけしは着替えて、外に出た。

マイケル2011

たけしの勤務する塾に新人講師が入った。新人講師といっても、大學生であるが。

「ども。マイケルっす」

「え。外人？」

「日本語しゃべれますよ」

このマイケル。教えるのは上手いのだが、厄介なところがあった。イケ面なので女子生徒がホの字になってしまうのだ。

「マイケル先生。うちに遊びに来て。あたしの大事なものあげちゃう」

「そんなこと言われても……」

万事この調子である。

まあでも人気だからええやんとたけしは思う。

仕事が終わって、マイケルとたけしは、牛丼屋に行った。

「マイケルは将来何になりたいんだい？」

「特にないですねえ。食べればいいす。たけしさんは？」

「オレは作家」

たけし、刑務所に入る。

たけしは刑務所に入ってしまった。塾の教え子に手を出してしまったためである。

独房でさびしくするたけし。ロリコンは重要犯罪なので独房なのだ。鉄格子の外では月がビール飲んで酔っ払ってる。

「たけし。面会だ」

「はい」

面会室に行くと、華子が目をうるませて立ってる。

「たけちゃん。どうしてなの。あたしがいるのに。あたしがいるのに」

「つい、若さの魔力に負けちゃって……」

「たけちゃんのバカ！」

華子はガラスに手を当てる。たけしも当てる。

「たけちゃん。結婚できないの」

「とにかく作家にならないとできない。刑務所でも書くよ」

華子は悲しそうだ。

「そう。がんばって」

「うん」

たけし、刑務所から出る。

たけしは、一週間くらいして刑務所から出た。再び、スーパーと塾のバイトを始める。人手不足だったのだ。

たけしは、休日に、アパートで、小説を書く。

暑いので、風呂場に行き、冷水シャワーを浴びる。浴びながら、変な踊りをして、変なことを叫びわめく。

「非正規労働者に力を！ 非正規労働者に力を！」

非正規労働者は、現在約1700万人いる。全労働人口の三分の一。1985年の段階で600万人だったことを考えると驚異的な時代である。

たけしは焦る。オレ、小説家になれば、すべてオツケーなんだけど、なれなかつたら、一生非正規だぞ。

しかし、焦つてるときほど、ゆっくり丁寧にやる。

そうすればミスが減って逆に速い。

丁寧に丁寧にバイトをし、丁寧に丁寧に小説を書く。

それしかない。

たけしは、風呂場から出て、タオルで身体を拭き、冷蔵庫を開け、ペットボトルを取り出す。

クーラーをかける。一時間に設定する。節電しないとイケない。低所得であるし、震災が起きてから、電力が不足している。

クーラーなしで、扇風機をかけながら、つても風流でいいもんだ。

「風鈴買おうかな」

誰に話してるのかな。読者かな。

たまに不安になる。

たけしは、たまに不安になる。オレは一生プロ作家になれないのではないか……。

そうになると、社員の訓練をしてこなかったから、アルバイトを続けないといけない。引きこもりになるうにもスポンサーがない。

アルバイトは低賃金である。きつい。

そう考えると、不安で不安でたまらなくなる。

現在、35歳。芥川が自殺した年齢だ。

たけしは、部屋で一人頭を抱える。

孤独である。

「うわああああああああ」

と叫びたい。気がおかしくなりそうだ。

このままではいけない。とたけしは思う。

たけし、旅に出る。

たけしは旅に出ることにした。無論、貯金などアルバイトだからない。

その土地その土地で働きながら旅をしようという魂胆だ。

プラットホーム。

華子が見送りに来ている。

「たけちゃん。必ず帰ってきてね」

「おおげさだなあ。戦争に行くわけじゃないよ」

「最近、世の中、物騒だから」

「うん。ありがとう」

たけしは華子と手を握った。

それもすぐ離れた。

機関車が走り出した。

すごい煙を吐いている。

しゅっしゅっしゅっしゅ。

華子が走る。

「痛い！」

こけた。こけて、鼻から血を流した。

「あははは。バカだなあ。ハイヒールはいてるの忘れてるよ」

たけしは、文庫に目を落とした。

マーク・トゥエインの「人間とは何か」だ。

しかし、しばらくして眠くたってきたので、

ケータイのアラーム機能をセットして眠った。

向かいに座っていたおばあさんが、たけしが腹に置いていた文庫を

勝手に取り上げて、勝手に読んだ。ちよつとぼけているようだ。

「ふがふが。なんじゃこれ。なんじゃこれ」

ばあさんも読んでるうちに眠くなってきた。

要するに、内容が難しいってことだね！！

機関車は午後二時には、チンジャオロースー県に入った。

たけし、旅から帰る。

たけしは旅から帰り、また小説を書き始めた。

ニューズで通り魔事件のことをやっている。今月に入ってもう三件起こってる。ひどい時代になったもんだ、とたけしは腕を組んだ。

「はーあ。華子。彼女は正社員」

一方でたけしはアルバイト。

その差はものすごいことである。所得で計算すればそれはもう絶望的なまでだ。

しかし、たけしはたけしの道をゆかねばならない。華子は華子の道を歩んでいるのだ。

たけしは、20枚ほど書いてから、アパートを出た。

「あ。月だ」

夜空を見上げると希望に胸がふくらむ。

「ああ。明日はどんな日になるかな」

たけしは足取り軽く、スキップまじりに歩いた。

すばるはるはるはる。

すばる文学賞に落選した。

たけしは、失意のうち、街をさまよった。

オレはいつたいたいどうすればいいんだ。35歳でアルバイトで童貞。小説家になるためだ。

しかし、出版社からノーを突きつけられた……。絶望。

陰鬱。もうこのまま死んでしまいたい。こんなにもつらいなら生きてる意味がない。

たけしはどうしていいかわからない。

「もうだめだ。死ぬしかないのか……」

雨が降り始めた。

ざああああああああああ。

たけしは、つらい。

すばる後

たけしは、しかし、しばらくして、考え直した。すばる文学賞を目標にしたから長編が書けたわけであり、これすなわち収穫である。

すばるがなければ、書き上げることができなかった。それに落選したからといって、作品が面白くないわけじゃない。（無論、処女長編ゆえに技術的に至らないところはある）

もつと言うと、落選したから、小説が自分から逃げることはないし、死ぬわけでもない。当たり前のことである。

たけしがアマチュアであっても小説は見捨てないし、新人賞に落選したからって、やくざに殺されるわけじゃない。苦しいときも悲しいときも小説はたけしの味方。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6186q/>

ロックンロール大将

2011年12月11日21時48分発行